

牧田諦亮監・落合俊典編

七寺古逸經典研究叢書 第六卷

中國・日本經典章疏目錄

大東出版社

『貞元新定釋教目錄』卷第二十九・卷第三十解題

宮林昭彦

◆ 經題及び書誌・體裁

『貞元新定釋教目錄』（以下『貞元錄』と稱す）三十卷は、唐の德宗（在位七七九～八〇五）治世下の貞元十六年（八〇〇）長安西明寺の僧圓照によって編纂されたものである。圓照はこれに先立って智昇の『開元釋教錄』（以下『開元錄』と稱す）を補訂した『大唐貞元續開元釋教錄』三卷を貞元十一年（七九五）に完成させ、『開元錄』以降の新譯不載の缺陷を補った。しかるに全面的改訂を施す必要に迫られ全三十卷の『貞元錄』を編集させたのである。

一般に經錄と稱されるこれら目錄類には年號を冠することが屢々見られる。本書も貞元の代に編せられたことから附せられたものであり、これは『開元釋教錄』を念頭に置いた書名であることは自明であろう。開元を貞元とし、新たに定めたことから新定と附し、釋教錄を釋教目錄と一文字追加して書を飾った。『開元錄』二十卷から『貞元錄』三十卷への新譯追加を含めても實質的には五卷の増量であるが、體裁を整えるため各々一卷を減量して三十卷としたものであろう。

『開元錄』の卷十九と卷二十は入藏錄と稱され、前者を入藏錄卷上、後者を入藏錄卷下とする。『貞元錄』も同様で卷二十九と卷三十が貞元入藏錄卷上と貞元入藏錄卷下と通稱される。入藏錄が重要視されるのは經錄の中に於ける位

置付けは當然のことながら、特に一切經書寫事業推進上の故をもってである。

『貞元錄』の諸本には高麗版大藏經本と、寫本として平安寫經が知られている。大正新脩大藏經には高麗版を底本とし、平安時代書寫聖語藏本（卷一～卷十九）と黑板勝美氏藏古寫本（卷二十九・卷三十）、享保十六年刊大谷大學藏本等を對校本としている。

『貞元錄』は塚本善隆博士がいみじくも指摘された如く、勅撰にも拘わらず宋版等中國本土で早くから失われたものである。高麗版大藏經本にしても後世の追加や削除が行われたものであり、そのためにも日本に傳來した古寫本によって原形態を復元することが可能となるものである。塚本博士はこのような事情を踏まえて早期から古寫本『貞元錄』の刊行を唱えておられた。

本書に收めた七寺藏の『貞元錄』卷二十九と卷三十は必ずしも貞元十六年撰の祖本とは思われない。祖本の復元はより綿密な考證が必要であろうが、今はその第一歩として日本の平安時代中後期にあって支配的な『貞元錄』卷二十九と卷三十、すなわち『貞元錄』入藏錄を翻刻するものである。

*

*

次に書誌について述べてみよう。用いられている料紙は他の七寺一切經と同様の黄楮紙であり、天地界線は朱、縦界線は墨という七寺一切經を特徴付ける形態を有し、卷二十九の一紙は、縦二七・二糎、幅五十一・六糎、總じて五十一紙より成っている。天界三・〇糎、地界三・四糎、界高二十・七糎、界巾二・五糎。假し函藏。表紙が失われ、補修あるも蟲損甚だしく、漸く卷子本の形態を保っている。卷首に「右點法勝寺金字經 左點伏見本 星點梵釋寺本」とあり、また朱書にて「此錄本□□□也今是入藏錄二卷第卅九第卅以爲／上下二卷□者□并德行□□□及經論所出可見／前之卷本人藏錄者一□□帙□經論□次第耳」と記されている。見返しには（六行印記）「奉預勸請守護權現

／伊勢内外梵尊土所牟山／白山妙理熊野三所山王三聖／鎮守三所多度津嶋南宮千代／大行事／熱田大明神 八剎大明神」が摺られ、その紙背には一行印記「願主從五位下散位大中臣朝臣安長氏」がある。

また卷末に貞元十五年（七九九）の勅撰記「貞元十五年十月廿三日奉勅修撰至十六年四月／十五日進上五月十日勅下流行／翻經都勾當右街諸寺觀釋道二教事千福寺上座沙門靈遂奉撰／翻經臨壇西明寺賜 紫沙門圓照等奉 勅撰／右神策軍護軍中尉兼右街功德使金紫光祿大夫如／内侍省事上桂國臣第五守高等進／右（左）神策軍護軍中尉兼左街功德使開府儀同三司如内侍省事／上桂國公臣竇文揚同進」がある。

奥書は「安元二年十月九日書寫畢／執筆大寶坊之／同十八日一校了 筆師」とあり、見返しと同様の六行印記「奉預 勸請守護權現／伊勢内外梵尊土所牟山／白山妙理熊野三所山王三聖／鎮守三所多度津嶋南宮千代／大行事／熱田大明神 八剎大明神」が摺られている。

卷三十では、一紙は縦二十七・二糎、幅五十四・七糎、總じて三十六紙より成っている。天界三・二糎、地界三・三糎、界高二十・八糎、界巾二・二糎。假二十七函藏。表紙が失われているが卷子本の形態を保っている。一部蟲損があるものの補修によって保存状態は概ね良好である。第一紙の裏に「願主從五位下散位大中臣朝臣安長氏」の一行印記がある。奥書は「安元貳年^丙 十月十七日書畢 良幸／大法房／同十八日一校畢筆師」。卷末に朱書にて「又以清水寺御經藏目錄一校了」と記されている。さらに六行印記の「奉預 勸請守護權現／伊勢内外梵尊土所牟山／白山妙理熊野三所山王三聖／鎮守三所多度津嶋南宮千代／大行事／熱田大明神 八剎大明神」摺記がある。

次に書寫底本及び對校本のことについて考察してみたい。卷二十九の巻首に「右點法勝寺金字經 左點伏見本 星點梵釋寺本」とあること、加えて卷三十の卷末に朱書にて「又以清水寺御經藏目錄一校了」とあることから七寺本の

依據した諸本が明確に斷定できる。だが底本そのものについては不明である。

目錄文中の「法本」というのは法勝寺藏本を意味しているものであろう。^②恐らく七寺一切經の書寫グループの書き込みであろう。また同じく文中の「イ」は異本を示す略記號であるが、何處の經藏本の異本か特定できない。法勝寺金字經・伏見本・梵釋寺本・清水寺御經藏目錄以外の所藏本であると推測される。三一九番の『浴像功德經』の夾注（割注）に「法勝寺本无功徳二字」とあるのは注目してよい。具體的寺院名を目錄文中に擧げるのは異例である。本書の底本と法勝寺藏本とが極めて近接していることを示している。

法勝寺が平安時代後期にあってどのような地位に在ったかは林屋辰三郎博士の研究を俟つまでもない。落合氏によれば佛教文獻學上の司令塔的地位であったと言ふことである。^③平安時代前中期にあっては梵釋寺がその地位を占めていた。そうなるに両者の中央に置かれている伏見本の基本的性格も容易に把握出来るであろう。^④

◆ 構成と内容

本巻は『貞元錄』三十卷の内二卷、第二十九卷と第三十卷を取り上げたものである。この二卷は併せて入藏錄となつている。全體に互る構成と内容については先行する研究に據りたい。^⑤

さて、本書の構成は『開元錄』の入藏錄をほぼ踏襲するものであるが、それぞれ部數卷數が増大している。さらに

七寺本と大正藏本の底本となつた高麗版とでも相違が見られる。七寺本『貞元錄』卷二十九の入藏錄上に、
合大小乘經律論及賢聖集傳兼貞元新入藏經。總一千二百三十八部。合五千三百五十一卷。四百九十九帙。

とあるが、高麗版（『大正藏』の底本）では

合大小乘經律論及賢聖集傳兼貞元新入藏經。總一千二百五十八部。合五千三百九十卷。五百一十帙。

1256 1234

となっている。部巻數にして二十部三十九巻の増である。ところが後述するように、この數字が出鱈目なのである。順次検討していってみることにする。

入藏録上は、大乘入藏録であり經律論の三部に分かれている。因に次の（ ）内は高麗版の數字である。

*大乘經六百三十七部二千三百八十三卷二百一十四帙（大乘經六百八十二部。二千四百一十三卷。二百二十一帙。）
大乘律二十七部五十五卷五帙（大乘律二十七部。五十五卷。五帙。）

大乘論九十九部五百二十卷五十帙（大乘論九十九部。五百二十卷。五十帙。）

大乘經重單合譯五百二十八部二千廿四卷（大乘經重單合譯四百九十一部二千四十卷）

大乘律と大乘論は七寺本と高麗版とは相違ないが、大乘經で四十五部三十卷違が見られる。大乘經での相違四十五部三十巻は非常に大きい、實際に部數を計算すると兩書ともに誤數が巻首に記されていることが分かる。實數は七寺本が六四〇部、高麗版が六三八部である。ところで、七寺本六四〇部の内次の六部は高麗版に見られない。

- ① 79 『新譯大虛空藏菩薩所問經』八卷 不空
- ② 323 『木患子經』一卷
- ③ 365 『文殊師利菩薩六字呪功能法』一卷
- ④ 494 『大乘造像功德經』二卷 天智
- ⑤ 525 『金剛頂瑜伽他化自在天理趣會普賢修行念誦儀軌』一卷 不空
- ⑥ 640 『慈仁問八十種好經』一卷

この④の『大乘造像功德經』二巻は天智（提雲般若）によって唐・天授二年（六九一年）に譯され、『開元錄』の入藏録には收録され、高麗版『貞元錄』入藏録も踏襲されているが、何故か七寺本『貞元錄』入藏録だけが削除されてい

るのである。

⑥の『慈仁問八十種好經』一卷は興味深い資料である。この經名が出る次の行は、大谷大學藏法隆寺一切經本を見ると、七寺本で「上二十四經二十四卷同帙」とある箇所を二十四經の字を消して二十五經としている。いずれかの段階で付加したため、計算が合わなくなったのであろう。『慈仁問八十種好經』は大正藏の八五巻疑似部に入っているのも奇妙であるが、この底本が平安時代中期寫の石山寺藏本ということである。⁶⁾

一方、高麗版六三八部の内次の四部が七寺本大乘入藏録の大乘經中に記載されていない。

- ① 『守護國界主陀羅尼經』十卷 般若共牟尼室利譯（『大正藏』五五卷一〇二五頁上）
- ② 『千臂千鉢曼珠室利經』十卷 金剛智譯（同一〇三四頁中）
- ③ 『般若波羅蜜多心經』一卷 般若譯（同一〇三六頁上）
- ④ 『本生心地觀經』八卷 般若譯（同一〇三六頁上）

この四書の内三書は般若（生没年不詳）が關與している。般若の翻譯活動は主に貞元年中（七八五〜八〇五）に行われているので、『貞元錄』を皇帝に進上した貞元十六年（八〇〇）四月十五日まで間に合わなかったとも考えられる。

次に入藏録下は、小乘および賢聖集傳の入藏録であって、小乘は經律論の三部に分かれている。

小乘經律論等三百三十部一千七百六十二卷一百六十五帙

小乘經二百四十部六百一十八卷四十八帙（小乘經二百四十部。六百一十八卷。四十八帙）

小乘律五十四部四百四十六卷四十五帙（小乘律六十一部。四百九十三卷。五十帙）

小乘論三十六部六百九十八卷七十二帙（小乘論三十六部。六百九十八卷。七十二帙）

*賢聖集百四十五部六百三十一卷（賢聖集一百一十二部。六百一十八卷）

小乘經と小乘論とに相違は見られないが、小乘律で七部四十七卷の増加、賢聖集で三十三部十三卷の減少が見られる。小乘律七部四十七卷の増加は

- ① 義淨譯『根本説一切有部毘奈耶藥事』二十卷
- ② 同譯『根本説一切有部毘奈耶破僧事』二十卷
- ③ 同譯『根本説一切有部毘奈耶出家事』五卷
- ④ 同譯『根本説一切有部毘奈耶安居事』一卷
- ⑤ 同譯『根本説一切有部毘奈耶隨意事』一卷
- ⑥ 同譯『根本説一切有部毘奈耶皮革事』二卷
- ⑦ 同譯『根本説一切有部毘奈耶羯恥奈事』一卷

(注) 卷数は總數五十卷だが、内三卷缺とされている。

等である。これらの増加について高麗版では、

右此上從藥事下七部共五十卷。竝三藏沙門義淨從大周證聖元年至大唐景雲三年已來兩京翻譯。未入開元釋教錄。搜檢入貞元目錄。於内由缺三卷。訪本未獲已上七部四十七卷共五帙(亦右闕本錄中收爲本未足故且記此)。

〔大正藏〕五十五卷一〇四三頁中

と述べているが、少なくとも貞元十六年時には未入藏であったものである。七部四十七卷の入藏時期については明確にできない。

また賢聖集で三十三部十三卷の減少となっているのは主に三階教の典籍が削除されたからであるが、周知のように三階教は後世僞濫の宗教とされたものである。それらの書名を列挙してみよう。三十五部四十卷が三階教關係である。

この箇所には右點左點星點どれも付せられていない。

- | | | | | | | |
|---|------|--------------------|--------|------|-----------------|---------|
| ① | 1209 | 三階佛法四卷 | 隋沙門信行撰 | ② | 1210 | 十大段明義三卷 |
| ③ | 1211 | 根機普藥法二卷 | ④ | 1212 | 三十六種對面不識錯法一卷 | |
| ⑤ | 1213 | 大乘驗人通行法一卷 | ⑥ | 1214 | 對根淺深發菩提心法一卷 | |
| ⑦ | 1215 | 對根淺深同異法一卷 | ⑧ | 1216 | 末法衆生於佛法廢興所由法一卷 | |
| ⑨ | 1217 | 學求善知識發菩提心法一卷 | ⑩ | 1218 | 廣明法界衆生根機法一卷 | |
| ⑪ | 1219 | 略明法海衆生根機法一卷 | ⑫ | 1220 | 世間出世間兩階人發菩提心法一卷 | |
| ⑬ | 1221 | 世間十種惡具足人廻心入道法一卷 | ⑭ | 1222 | 行行同異法一卷 | |
| ⑮ | 1223 | 當根器所行法一卷 | ⑯ | 1224 | 明善人惡人多少法一卷 | |
| ⑰ | 1225 | 就佛法内明一切佛法一切六師外道法兩卷 | ⑱ | 1226 | 明大乘无盡藏法一卷 | |
| ⑲ | 1227 | 明諸經中發願法一卷 | ⑳ | 1228 | 略發願法一卷 | |
| ㉑ | 1229 | 明人情行法一卷 | ㉒ | 1230 | 大衆制法一卷 | |
| ㉓ | 1231 | 敬三寶法一卷 | ㉔ | 1232 | 對根起行法一卷 | |
| ㉕ | 1233 | 頭陀乞食法一卷 | ㉖ | 1234 | 明乞食八門法一卷 | |
| ㉗ | 1235 | 諸經要集二卷 | ㉘ | 1236 | 十輪依義立名二卷 | |
| ㉙ | 1237 | 十輪略抄一卷 | ㉚ | 1238 | 大集月藏分依義立名一卷 | |
| ㉛ | 1239 | 大方廣十輪經 | ㉜ | 1240 | 月燈經要略一卷 | |
| ㉝ | 1241 | 大集月藏分抄一卷 | ㉞ | 1242 | 廣七階佛名一卷 | |
| ㉟ | 1241 | 迦葉佛藏抄一卷 | | | | |

⑤ 1243 略七階佛名一卷

2.145/16
7.112/16

賢聖集一四五部六三一巻から三階教典籍の三十五部四十巻を差し引くと一一〇部五九一巻となる。高麗版では一二二部六一八巻であるから二部二十七巻増えていることとなる。ただ、具體的には、圓照撰『續開元釋教錄』三巻と法琳撰『別傳』三巻との二部六巻であり、二十七巻と整合しない。尤も部数は合致している。

これら二書の入蔵については、先づ圓照撰『續開元釋教錄』であるが、未入蔵としたものを圓照自身が中途で入蔵したとは稍考えずらいのではないだろうか。法琳撰『別傳』三巻の入蔵は未詳。

また逆に三階教典籍の削除の時期はいつであらうか。矢吹慶輝博士もそのあたりのことは論及されておられない。恐らくは推測の域を出ないからであらう。

*

*

また高麗版の入蔵録と大きく異なる點は、經名・譯者名・異なる巻數本の有無・經名の異同・紙數・分類（同本異譯等）などである。この七寺本は『貞元錄』巻二十から卷二十三までの有譯有本録の諸データが一部入れられている。このような形態が祖本から存在していたのか、或いは後世付加されたのか、現時點ではこれらのことを明らかにすることは困難である。目錄の形態としては高麗版などのような簡素なものよりずっと分かり易く使用に耐え得るものであったらう。

なお、朱で付けられた右點左點星點等の點であるが、卷二十九は概ね三點がそろっている經が多い。卷三十でも三分の二ほどは順調に點がついているが、賢聖集の一〇九九番から三點揃いが極端に減少する。一二二〇番の『大段明義』からの三階教典籍三十四部は全く無點となっている。ただ『三階佛法』の夾注には「法本人之」とあり、法勝寺藏經に存したことがわかる。さらに不入蔵録目の經典一一八部も無點である。ところが、大谷大學藏の法隆寺一切

經の『貞元錄』卷三十では三階教典籍の筆頭『三階佛法』のみに星點と右點が墨書されている。不入蔵録目において三十有餘の經典に點が付けられているのである。

七寺一切經中にはこの不入蔵録目の疑經『毘羅三昧經』が藏されているが、この底本は實は法勝寺藏本であったから、この經に點がついていても良さそうなものである。

果たして經典名の頭部に伏せられた點はどのような意味があったのだろうか。現藏の有無とするならば由緒ある大寺院の名が廢れはしないか。當然これらは全て所藏していなければならぬ。單に目錄上での書名の照合であったのだろうか。どうにも讀み解くことが出來ずこれらは今後の課題としておくしかない。

*

*

以上『貞元錄』入蔵録の總部數の實數を擧げてみると、高麗版は表示が一、二五八部に對して實數は一、二二三部である。七寺本は表示が一、二三八部に對して實數は一、二四三部である。計算間違いであるのか、もしくは誤刻されたものか俄に判斷できないが、實像が浮かび上がってきたことだけは間違いない。

一方、七寺本が底本とした藏本は特定できなかったが平安學問佛敎界の主だった寺院の『貞元錄』を十二分に参照して書寫したことは分明である。かくして當代にあっては最大限とも言える書寫嚴密性を保つ入蔵録であったこととなる。經録は分かり易いように奥が深く、人々の新鮮な探求心を辟易させてきた一面があるが、一切經の司令塔であることを念頭に入れて本書を座右とされることを期待するものである。

(1) 塚本善隆「日本に傳存する古本貞元錄について」(『神田喜一郎還曆記念論文集』昭和三十二年。同刊行會。のち『塚本善隆著作集第三卷所收。大東出版社。昭和五十年。)に諸寫本が紹介されている。向此のほかにも名取新宮寺一切經、西方寺

一切經に平安鎌倉書寫本がある。

- (2) 七寺本『貞元錄』卷二十九の三一九番夾注に「法勝寺本无功德二字」とあり、その後省略して、三六五番夾注「法本有之」、三六六番夾注「法本有此經」、同卷三十の二〇九番夾注に「法本人之」等と出ている。
- (3) 落合俊典「平安時代における入藏録と章疏目録について」(本卷所收)。ここでは法勝寺の來由から梵釋寺の藏經について論及され、従来の研究には全く見られなかった佛教文献學上から七寺一切經の基本的構造を説明しようとしている。なお、灰燼に歸し跡を動物園の一角に留める法勝寺の僅かに残る遺物については砂原圓讓「法勝寺の西教寺兼併」(『西教寺の歴史と寺寶』總本山西教寺發行。平成元年發行。)参照。
- (4) 立正大學の中尾堯教授を中心とする調査によって京都妙蓮寺藏の松尾社一切經の全貌が學界に知られるようになった。この平安寫經の奥書によって梵釋寺本とならんで伏見本が校合に用いられたことがわかり、當時にあっては主要な藏經本であることが實證された。中尾堯編『京都妙蓮寺藏松尾社一切經調査報告書』大塚巧藝社。平成九年二月。
- (5) 林屋友次郎「貞元新定釋教目錄」解題(『佛書解説大辭典』第六卷)、同「開元釋教錄」解題(『佛書解説大辭典』第二卷)。同『經錄研究』前篇。昭和十六年。岩波書店。常盤大定『後漢より宋齊に至る譯經總錄』(東方文化學院東京研究所。昭和十三年)。
- (6) 石山寺文化財綜合調査團編『石山寺の研究』一切經篇七九九頁。昭和五十三年。法藏館。
- (7) 矢吹慶輝『三階教之研究』一四六頁〜一七六頁。昭和二年。岩波書店。
- (8) 大谷大學藏法隆寺一切經の『貞元錄』卷三十の書誌については落合俊典氏より教示を受けた。大谷大學の木村宣彰教授ならびに同圖書館のご配慮に感謝する。

古聖教目錄 (擬題)